角川文庫
—1188—

肉體の門

田村泰次郎

角川書店

昭和二十八年十月十五日　初版發行
昭和四十五年二月二十日　三十五版發行

定價は、帶・カバーに明記してあります

著作者　林・芙美子

發行者　角川源義

印刷者　東京都千代田區飯田橋一ノ二　中内佐光

發行所　東京都千代田區富士見二ノ十三　株式會社　角川書店
郵一〇二　振東京一九五二〇八
電話東京(265)七二一(大代表)

角川文庫

Printed in Japan　曉印刷・多摩文庫

落丁・亂丁本はお取替え致します

肉體の門

他五篇

田村泰次郎

角川文庫

1188

目次

肉體の門　五
刺青　三九
朝顔　六三
檻　八七
肉體の惡魔　一〇八
春婦傳　一三五
解說　十返肇　二〇四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

肉體の門

小政のせんと自分で名のる淺田せんは、裸になると、まだ乳房も十分にもりあがつてはゐない。十九歳にしては皮膚に艶がなく、筋肉に脂肪の乘りがうすかつた。身體の靑白さは、すこし病的のやうだつた。

せんは一日置きに朝のあひだ、矢の倉の刺靑師彫留のもとへかよつてゐる。まだ四十に間はあるが彫留は、戰前からやくざのあひだではかなりに知られた彫師で、戰時中旋盤をあつかはされてゐた徵用歸りの腕にも變りなく、針の目の綺麗さと、仕あげの派手さで、いま、賣りだしだつた。淺草のある親分のおもひ者で、もと柳橋に出てゐた女の背に彫つた、彫留の牡丹は蝶が來てとまるといはれ、水もしたたるとまで噂のある、終戰後彫物界第一等の傑作といはれてゐる。

「親方の牡丹は、屋根熊さん以上だと、年寄り連中はいつてますぜ」客が愛想をいふと、「なあにあつしのはいたづらでさあ」と、口ではへりくだつたが、屋根熊の絢爛さは勿論、彫友、彫金、宇之などといつたかつての名手たちの手法まで、ひそかにとり入れてゐることは、まちがひなかつた。そんなやうに藝の上ではひたむきなところがあつたが、いはゆる名人肌といつた氣むづかしさがなく、客當りはごく氣さくなために、家には客がたてこんでゐる。横濱や水戸からかよつてくるのもあつた。

燒跡に建つた六疊に四疊半のバラックである。四疊半を仕事場に、六疊は客の控への部屋にあててゐたが六疊間は朝から晩まで客でいつぱいなので、彫留のかみさんは、赤ん坊を抱きながら、お茶の接待に追はれきりである。客は博奕打ちやテキ屋ばかりでなく、復員の闇屋からチンピラまでゐた。せんのやうなしやうばい娘もゐた。一體に、玄人と素人との區別が、今の世間でもあいまいなやうに、ここでもさうだつた。主人が客に小言をいはないのをいいことに、闇屋やチンピラたちは、勝手なことをしやべり散らしてゐる。ガソリンをいくらで買つて、いくらで賣りとばしたとか、いかさまズルチンでいくら儲けたとか、さう思ふと、チンピラたちは「かつ（恐喝）でまきあげるにやまんぢゆう（時計）が、てつとり早えが、足がつくのも早えからな」なんていつて威張つてゐる。博奕打ちやテキ屋はどつちかといふと無口だつた。今の世間の例にもれず、ここでも素人が玄人を壓倒してゐた。彫るのは、一日一寸角の大きさときまつてゐたが、客が多いので下働きが二名ゐる。どの客もよく金を都合して、根氣よくかよつてゐる。きちんときまつてかよつてゐたのが、急に顏を見せなくなるのがあつた。檢擧されるか、身體があぶなくなつてずらかるかするのにちがひない。

「關東小政」と一字二寸角の勘亭流で、せんは左の上膊に彫つてもらつてゐた。一字三百圓で、すでに三十日あまりかよひ、まだ「政」の字だけが筋彫りのまま殘つてゐる。彫りあげると、千二百圓をつぎこんだことになるのだつた。街のしやうばい娘であるせんにとつて、千二百圓は安い金額ではない。ただせんはなにがなんでも、自分の肌に刺靑がして見たいのだ。身體を賣つても、まるつきり肉體のよろこびをまだ感じない彼女は、すこし早くひらき過ぎた花が匂ひのうすいやうに、身體も、精神もどつかまともでないかもしれない。せんは人間の皮膚に、さまざまの

繪や字が刻まれることが珍らしいのだ。さういへば、彫留へ來る男たちは、みんなさうなのにちがひない。丁度、原始人が、自分の身體を刺青で飾るやうに、それが智能の低い子供のやうな單純なよろこびだつた。それとともにまた、原始人が虎や、鰐や、熊と鬪ふには、人間以上の能力をそなへたなにものかに化けなければならないのと同じやうに、せんのその日その日が鬪ひである生き方には、自分よりももつと強い、逞ましい神祕な力を本能的に欲しがつた。自分たちの繩張りを荒らす、山の手あたりのお孃さん面したパンパン娘を、路地にひきずりこんで、ぱつと左の腕をまくりあげ、「關東小政」の四字が月の光か、ネオンのあかりに映えるのを眼にしたときの、相手の毒氣を拔かれた表情を想像すると、鬪志で胸もとがうづくのだ。

「お前さん、お見それでないよ、あたしやかういふものさ」と、凄味を利かせてやんはりと出るか、それとも、「見損ふねえ、へん、あつちにもこつちにもあるお姐えさんと、お姐えさんがちがふんだよ」さう頭からかむせてやらうか——三つ束ねの墨を含んだ絹針が、ぷつ、ぷつと皮膚を嚙む痛さを、齒を喰ひしばつてたへながら、ひそかに口のなかでつぶやいてゐると、いつか痛さも忘れてたのしくなるのである。「ちえつ、强情なあまだなあ」襖をへだてて、しんとした氣配に、チンピラどもは眼を見あはせて舌打ちをする。

小政のせんはまるで少年のやうな筋肉だけの肉體を持つてゐるが、その魂はまた、氣に入らぬものには、なんにでも嚙みつかうとする氣魄にあふれてゐる。せんにはどんな怖いものもない。いや、せんだけでなく、彼女の仲間は、二十三歳の菊間町子をのぞけば、ボルネオ・マヤこと菅マヤでも、ふうてんお六こと安井花江でも、ジープのお美乃こと乾美乃でも、みんな人間の少女といふよりも、獸めいてゐる。それも山猫か、豹のやうな小柄で、すばしつこい猛獸である。さ

ういふ猛獣たちが獲物を狙つて、夜のジャングルをさまよふのとかはらない、必死な生存欲に憑かれて、彼女たちは宵闇の街をうろつくのだ。背廣のサラリイマンであらうと、復員服の闇屋であらうと、闇肥りの年輩者の工場主であらうと、みんなこの猛獣たちの獲物である。

彼女たちのしやうばいは、女衒や桂庵みたいな、あひだにはいつて儲ける手合ひがゐない。街の都指定の鮮魚直賣所には新聞紙に下手な字で、「生産場と消費者との直結」とうたつてあるが、彼女たちのしやうばいのやり方こそ、それにあたる。自分で客を見つけ、自分を賣る。これ以上の合理的な直賣法は、どんなやり手の商人でも考へだしたことはない。銀河や星のきらめいてゐる夜空のもとで、あるひは蒸し暑い雨雲の垂れこめた下で、焼けビルのなか、立ちかけのマアケットのなかで、埋め残されたじめじめした防空壕のなかで、彼女たちは雑作もなく、仰向いてたふれる。さうして、野天の取引はおこなはれる。客の眼は、彼女たちの瞳が意外に綺麗に澄んでゐるのを見て、とまどふときがある。まだ情慾の神祕を知らぬ彼女たちは、まつたく生きんがための必死なしやうばいにだけ打ちこんでゐるのだ。客はちよつとひるむ。彼女たちには、何故客がびくつくのかわからない。彼女たちは不安がり、客の眼がもとの好奇の光をとり戻すまで、ぢつと客を抱いて放さない。それが彼女たちの闘ひ、——生きんがための闘ひだ。

法律も、世間のひとのいふ道德もない。そんなものは、日本がまだ敗けないとき、彼女たちが軍需工場のなかで汗と機械油にまみれてゐるときを最後に、爆彈と一緒に——そして彼女たちの家や肉親と一緒に、どつかへふつとんでしまつた。なんにもなくなつて、彼女たちは獣にかへつたのだ。まつたく、彼女たちは廢都の獣である。彼女たちは地下の洞窟で眠り、喰らひ、野天でまじはる。そのまだ青い巴旦杏のやうな肉體は、なにものをも恐れない。むごたらしく、強い闘

ひの意欲だけがあふれてゐる。爆彈で粉碎され、燒きはらはれた都會は、夜になると、原始に還る。彼女たちの血に飢ゑた、凄慘な狩りがはじまる。狩りは旺盛な意欲をもつて、機敏におこなはれる。ある夜は、逆に彼女たちが狩られることがある。省線電車の驛で、高架線の下で、十字路で、彼女たちをつかまへようとする繩が幾重にも張りめぐらされる。だらしがなくて、ぼんくらな有閑娘たちが、それにひつかかつて、泣きべそをかいてゐるあひだに、彼女たちはすばしつこく巢にひきあげて、笑ひあふのだ。

けれども、彼女たちにも掟がある。それは自由を確保するための掟である。原始人のタブウのやうな、あるひは獸の世界にある「群」の意識のやうな、自衞と、生存のための連帶の秩序である。たとへば、彼女たちの繩張りである有樂町から勝鬨橋までの區域で、知らない娘が男をひつぱつてゐるのを見つければ、協同でさういふ外部の敵に襲ひかかる。さういふときのためや、彼女たちがさつ（警察）にあげられたときに、亭主だとか兄貴だとかになつて貰ひさげに來てくれる男の仲間がゐた。けれども、そんな若者たちは、決して彼女たちのいろでもなんでもない。ただの生活協同者にすぎない。外部に對してはさういふ掟のやうなものがあるが、仲間同士のあひだでも、「群」の掟がある。たとへば、正當な代價をもらはずに、自分の肉體を相手にあたへる者が一人でもあれば、それは自分たちの協同生活體の破壞者である。何故ならそんな行爲は自分たちのしやうばいを脅やかすことになるからだつた。そんな者に對する制裁は、慘酷で、假借なくおこなはれる。三箇月も彼女たちの仲間だつた一人の娘は、有樂町の高架線の下で寶籤を賣つてゐた學生と戀に落ち、「群」の掟を破つたがため、兵隊のやうに頭を丸刈りにされて、仲間から追ひだされた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

腐つた泥の匂ひのする掘割にのぞんだ燒けビルの地下室が、彼女たちの巣だつた。こんな地下の洞窟のやうな場所に、彼女たちが棲んでゐるとは、誰も、――そとで組んで仕事をする男たちも知らない。恐らく、ビルの持主さへ知らないにちがひない。浮浪兒と、ルンペンとが、ときどき何かいい貰ひものでもあるかと覗きに來た。彼女たちはそれを見ると、嚙みつくやうにがなりたてて、追つぱらつた。ここは客をつれこんでくるところではない。ここは彼女たちだけの安息所だ。鬪ひに疲れた獸の眠り、食ふ場所だ。

洞窟の入口には斷ち切れた水道管が、蛇のやうに鎌首をもたげてゐて、そこから朝も晩も水が噴きあげてゐる。水はコンクリーの傾斜のうへを流れて、掘割にそそいでゐる。この水で、米をとぎ、横文字のはいつたバターの二ポンド入り空罐を飯盒がはりに、飯を炊くと、素的滅法界な銀しやりが炊ける。

壁の崩れた箇所のすぐ前を、糞尿船や、砂利船がとほつた。近くの岸に平べつたい船がとまり、よくしなふ板を船と岸とのあひだにかけ、燒跡からこはれた煉瓦や鐵屑をいつぱいに積んでゐることもある。朝まだ暗いうちに、しこたま荷を積んでゐるらしく、この掘割へ吃水深く、ひつそりとはいつて來る船がある。

「小父さん、ここはお關所よ。ただとはいはないから、安くして、すこし置いてきなよ。なんだつたら、身體ととつかへてもいいわ」

米の闇船をからかふのだ。木更津あたりから夜出てくる船である。

ビルの岸に、半分水びたしになつた、ほとんどもう沈みかかつてゐる小蒸氣船があつた。蒸し暑くて、寢苦しい夜は、しごとから歸つた彼女たちは、水垢の匂ふ船室に寢そべり、ペンキの剝

げた舷に腰かけて、「長崎物語」や「婦系圖」を歌ふ。銀河が水面にうつつて、さざ波にゆれるのを眺めて歌ふ彼女たちの頭には、いまし方すましてきた男たちとの抱擁なんか、遠い世界の出來事としか思へない。

「あたいの母さんは、弟と河の中で死んだのよ。代地河岸でさ。弟つて七つだもの、逃げられないわ」小政のせんは、そんなとき生々しく自分の運命を思ひだす。せんの家は本所横網町で、駄菓子を賣つてゐた。母親と弟は橋を渡つて、柳橋まで逃げたのだつた。

「あんたは、そんとき、どうしてゐたの」と、ジープの美乃が訊ねた。

「あたいは、大崎の工場にゐたので助かつたんだよ。大川へ飛び込んだり、船に乘つたひとたち、みんな死んだわ。舷につかまつてゐて、死んでゐたお角力さんもゐたつてよ。水の上に出てゐる手首だけが眞黑に焦げたつて。水が燃える、――呼吸が出來ないのよ」「もう、そんな話はよしなよ」とボルネオ・マヤがいつた。「あたいたちは、みんな戰爭でやられた仲間にきまつてるぢやないの」マヤはボルネオへ行つたことはない。マヤの兄がボルネオで戰死した。それ以來彼女はボルネオのことばかり話すので、こんな名前がついた。眼が大きく、小肥りで色が淺黑いことも、この名前をひきたてた。けれども、ふだんは誰も、あんまりお互ひの過去をいひあはない。そんな感傷をわけあつてゐる氣持のゆとりがないのだ。まづ食はねばならないのである。そのためには、まづ呪ふことだと思つてゐる。なんでもかんでも、自分たち以外のものは、みんな呪ふのだ。浮浪兒も、ルンペンも、赤ん坊も、勞働者も、人妻も、みんな呪ふのだ。親も、もつと偉いひとも呪ふのだ。ビルも、電車も、トラックも、みんな呪ふのだ。誰も自分たちをかばつてはくれないことをはつきりさせ、自分の氣持にくぎりをつけるのだ。そこで、團結は一層强められ

る。その團結は誰が強ひるのでもなく、誰が教へるのでもない、どうしても生きて行かうとする本能が、ひとりでにさうさせるのだ。

街にはお嬢さんくさいあいまい娘たちが、大勢ゐる。そんな娘たちの組もあるだらう。けれども、そんな娘たちの仲間は、ただ肉體の興味だけで、だらしなくひきずられてゐる、はつきりとした徒黨といふのではない。その日その日の吹く風につれて、鋪道にこぼれあつまつては、また散つてゆく柳の葉つぱのやうに、顏をあはせて、一緒に遊んでは、つぎの日はまた知らぬ顏の、そんなものとはちがつてゐる。マヤたちのはあきらかに一つの組である。一つの黨である。戰火が、ひとりでに廢都の燒け跡に生んだ自然發生の黨である。何黨といふのだらう。名前も、七面倒な綱領もないが、飢ゑと孤獨にさいなまれた娘たちだけの、土から生えた根强い團結と、鬪爭力とを持つてゐる祕密の黨である。

「魂消たね、淺草の藝者で、太腿に蜘蛛を彫つてるのがゐるさうよ。白粉彫りでさ。酒を飲んだり、いきむと、白い蜘蛛が浮きあがるのだつて、――魔除けになるんだつてさ」彫留の家で聞いて來た噂を、せんが披露した。「いやらしいつたら、ありやしない」彼女たちは肌の手入れもしないし、幾日も風呂へ行かない。闇市で買つた一瓶八圓のいんちき香水を、思ひ出したやうに胸にふりかける。白粉のまだらに剝げ殘つた顏に、またパフをはたく、髮は酸つぱい汗の匂ひがした。それらが體臭とまじつて、彼女たちの身體からは動物園の獸の檻の前へ行くとする、あの獸特有の靑くさい、小便くさい、生活的な匂ひが發散する。彼女たちがいつも肌身から離さない身體にくらべて大きすぎる買ひもの袋や、手下げ籠のなかには、赤いセルロイドの石鹼箱がはいつてゐるが、なかはべとべとに濡れて、乾くときがない。肉體の取引がすむと、彼女たちはごし

ごしと、部分だけを偏執狂のやうに熱心に洗つた。妊娠と、病氣にかかるのを怖れる、これは自衞の本能からだつた。

人妻のよく手入れした肌や、お體裁ぶつたつつましさを見ると、へどが出さうに憎惡した。なんともいへない不潔感で、胸がわるくなる。不倶戴天の仇敵のやうに、唾でも吐きかねない。菊間町子を、仲間にはいつてきたときから、彼女たちが毛嫌ひするのは、そのためだつた。町子だけが二十三歳の人妻である。土橋のところで客をひつぱつてゐる現場を、小政のせんがみつけて、おどかすと、しまひには泣きだして境遇を訴へるので、つれてかへつたのだ。ところがいまでは町子の人妻らしい女臭さが、彼女たちの憎しみの的になつてゐた。彼女たちには町子の襟の抜き加減から内輪の歩き方まで、癇にさはるのだ。

硫黄島で良人を失つた未亡人だといふのだが、二月前から彼女たち

「お町さんたら、へんだよ、この頃、――ちつとも寄りつかないし、たまに歸つてくると、いやにそはそはと尻が落ちつかないぢやないか。男でも出來たんぢやないの」小政のせんが町子の擧動に敏感になつてゐる。「ねえ、マヤ、あんた、さう思はない？　たしかに普通ぢやないよ、いんばいならいんばいでいいぢやないか。なにさ、あの澄ました顏つきは」彼女たちは世間がなんと見ようと、こはいものはなかつたが、町子には世間の眼が氣になつた。中身はいんばいであらうと、よそ眼には素人の奥さんに見られたいのであつた。うはべだけとりつくろはふとするそんな分別が、彼女たちにはなにかいまはしく、不純に思へるのだ。

蒸し暑い夜で、ぢつとしてゐても、額や、胸に汗の玉が湧いた。町子は例によつてまだ歸らなかつた。マヤたちは、岸に涼んでゐた。今日は、せんの刺青が仕あがつたので、彼女は心が浮き

浮きしてゐた。濡れタオルを左腕にまいて、針痕の腫れをひやしてゐた。「あしたからは、小政の姐御つて、山の手のお嬢さんたちにお辭儀をさせてやるから」刺青をそつと右手でいたはるやうに押へるとせんは、全身に闘志がみなぎるのを感じた。突然足音がして、ひとのはいつてくる氣配がした。一足一足が用心深い歩き方をしてゐた。「誰？」とせんが呼んだ。人影は彼女たちのうしろに立つてゐるのであるが、返辭をしないのだ。「誰なのさ、一體。警察のひとぢやあない？」「お前たちはなんだ。ここはなにするとこだい」「ここは、あたいたちのおかん場よ。警察のひとなの」すると、ふうん、とひとりでうなづき、その男は寄つてきて、彼女たちのあひだに割りこんだ。暗いなかで、よくはわからないが、まだ二十四、五の若者だつた。すこし、びつこをひいてゐるのを、せんが眼ざとくみつけて、とがめた。「うん、いまお巡りに追はれて、一發喰らつたんだよ。擦過傷さ、たいしたことないよ。ちよつと、やすませてもらふぜ。お巡りがきたら、うまくいつてくれよ」「ここはこないよ、誰も」

男は安心したやうにしばらくぢつとして、彼女たちのなかに腰を降してゐた。「畜生、ちくちくしやがる」と、傷の痛みにうめいた。「――誰か燒酎買つてきてくれねえかなあ、表の屋臺で。どんなのだつて、かまはねえ」「あたいが買つてきたげる」マヤが立ちあがると、男はズボンのポケットから革の財布をとりだしてわたした。マヤはビール瓶を持つて出て行つた。マヤが出かけると、夜の夕立がきた。水面は夜目にも白いしぶきをあげた。せんたちは、男をさそつて、奥にはいつた。蠟燭をつけると、待ちかまへてゐたやうに彼女たちは男の顔を見た。肉の締まつた精悍な顔が、さつきから暗いなかで勝手に想像してゐたのと、寸分もちがはないのに、みんなはかへつてとまどうた。そのくせ、なぜか、ああ、よかつたといふ氣がした。雨がやんで、マヤが歸

つてきた。「あんたは、運がいいわよ。地面に落ちた血が、いまの雨で流れたといつて、表でお巡りたちが騒いでるわ」彼女たちはこの男の惡運の强さに、なにか神祕なものさへ感じた。男はさつきからあんまり口をきかなかつたが、眼だけは機敏に動かしてゐた。そんなしぐさにも、この男の旺盛で、すばしつこい自衞本能のひらめきを感じとつて、みんなの眼は小氣味よげに、飽かずに彼をみつめてゐた。

かうして、伊吹新太郎は、當分のあひだ、このうす暗い地下室で、彼女たちと起居をともにすることになつた。拳銃の彈丸傷は、かすり傷ではあるが、右の腿の肉を鋭利なナイフかなにかでざくりとゑぐりとつたやうになつてゐた。けれども、大陸の戰場で、胸に一回と、右上膊に一回貫通銃創を受けてゐる彼には、そんな傷など屁でもなかつた。二十日もぢつと寢てゐればひとりでに肉がもりあがつてきて、ほとんどよくなるにちがひない。前線の患者收容所の土壁の家の土間に、ぢつと動かずに寢てゐたことの經驗によつて、彼はある期間さうしてゐさへすれば、人間の身體は自然に治癒するものであることを信じて疑はない。この經驗が、自分の肉體のねばり强さについての自信を、ほとんど彼の信念のやうにさせてゐる。經驗からきた信念といふものは、なまやさしいものではない。伊吹には、自分の肉體のなかに存在する逞ましい生命力が、はつきりと自覺出來た。彼には絶望がなかつた。絶えず、自分の內部から發する生命の息吹のままに、衝動のままに生きてゐた。こんな明るくて、樂天的な男はめづらしい。マヤたちは、伊吹のしやうばいが何であるかについて議論した。せんはたたき（强盜）だらうといふし、花江たちはのびこみ（忍びこみ）にきまつてゐるといつた。最近流行つてゐるはいくる（自轉車窃盜）だらうともいふ者がある。あるとき、遠慮のないせんがそれを訊ねると、「なんでもやるさ、臨機應變だよ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com